

コウノトリ野生復帰学術研究報告

「豊岡」には学術的な魅力がいっぱい！ 学生が見た「豊岡」とは？

市では、平成16年度からコウノトリの野生復帰を基本テーマに、豊岡の自然・社会環境に関する調査・研究を行う学生を支援しています。学術的な研究フィールドとしての豊岡の魅力を市外に広く認知してもらおうと同時に、豊岡ならではの「知」を蓄積していくことをねらいとし

ています。

平成17年度は、グループ研究として1グループ、個人研究として3人が研究を行いました。住民に聞き取りを行い、昨年秋の放鳥以後に市民意識の変化を調べようとした学生、ワークショップにも参加して市民と交流を深めながら取り組んだ学

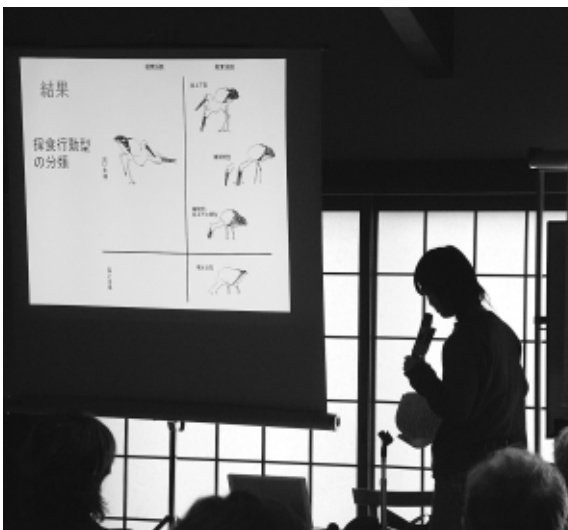
野生のコウノトリを一日中追っ

かけた学生など、どの学生も若さと情熱で「豊岡」に挑みました。

学生たちは「豊岡」の何を魅力と感じたのでしょうか、私たちに何を伝えようとしているのでしょうか。

その研究内容の概要を紹介します。なお、学生から提出された報告書の全文はコウノトリ文化館、図書館などで閲覧できます。

《問合せ》コウノトリ共生課



▲研究発表会でコウノトリと人の共存の実態などを報告する研究生（平成17年12月・コウノトリ文化館）

「祥雲寺地区の水田ビオトープ

水路における生物調査結果（総括）

宇都宮大学大学院農学研究所 笠原岳洋さん

◇調査方法

中干し期に田んぼの生き物が避難・生息する場所として作られた水路で、どのような生物がどれだけ生息しているかを、梅雨期、中干し期、稲刈り期、冬期湛水期にわたり調査した。水路を4区画に区切り、タモ網で採補

された生物を記録する方法で実施した。

◇調査結果と考察

全体で51種（魚類6、甲殻類4、貝類6、昆虫類28、両生類4、は虫類1、ヒル類2）の生物が確認された。

・ドジョウは稲刈り期の渇水により個体数が減少したものの、その後ある程度個体数が回復したが、フナ、タモロコは減少したままで、渇水の影響が非常に大きかったと思われる。
・兵庫県版レッドリストで準絶滅危惧種のマルガタゲンゴロウや全国的に減少しているクログンゴロウの生息も確認された。水棲甲虫類などにとって、水の流れがあまりなく、水深が浅く抽水植物（根が水底の土中にあり、茎や葉が水面から上に伸びている水生植物）が多数存在する水路は最適な繁殖・生育環境と思われる。

水田内に水がない時期の逃げ場として作られた水路が機能するためには、常にある程度の水量が必要である。また、泥上げや草刈りなどの管理を行わなければ植物の種類も変わっていき、多様な生物が利用できる水水域になってしまう。そのため、いかに適切な管理をしていくかが課題である。

「兵庫県豊岡市円山川下流域に生息する 野生コウノトリの2005年秋季に おける採食場所の利用」

東邦大学理学研究科生物学専攻
動物生態学研究室 武田広子さん

◇研究目的と方法

コウノトリ野生復帰に向けた採食環境の整備のための一助とするため、野生コウノトリを車で追跡し、目視と双眼鏡で観察した。さらにビデオ録画した映像の解析を行い、河川の浅水域での形態変化が採食行動に及ぼす影響を明らかにした。

◇調査結果と考察

2005年秋季における採食場所の利用、特に戸島の湿地利用について分析した。2004年秋季と比べて、2005年の方が河川の浅い水域を選べる好条件が揃っているにも関わらず、野生コウノトリは戸島の湿地を最も利用した。戸島の湿地は視界の開けた場所で、車道から約150メートル以上の距離があり、警戒せずに行動できたと考えられた。また、湿地の水深も0〜30センチの範囲で水の流れもなく、触覚によって捕食するコウノトリにとって、捕食を試みやすい条件であると推測できた。



▲田んぼに飛来する2羽のコウノトリ

「野生生物保護における野生生物と 住民との関係性― 放鳥後のコウノトリと住民とのかわり」

東京大学大学院農学生命科学研究科
森林科学専攻林政学研究室 本田裕子さん

◇研究目的

2004年から2006年春にわたり、住民がコウノトリをどのように捉え、コウノトリとの共生をどのように考えているかを調査してきた。今回は2005年9月24日の放鳥に着目し、放鳥後の住民意識の変化について調査した。

◇調査結果と考察

多くの人々が捉えるコウノトリは「もともと野生に生息していた鳥」である。多くの方々の尽力によって「豊岡が保護してきた鳥」コウノトリは、かつては「普通の鳥」であり、田植え時には「ツルポイ」に象徴されるように「害鳥」となる。住民は今回の放鳥を好意的に評価しているものの、メディアや観光客など外部から注目を浴びることについて、不安や戸惑いもある。これらさまざまな面を持つ住民とコウノトリの関係性を、今の時点で善か悪かと結論づけるのは性急であり、今回の調査も「放鳥直後」という特定の状況を分析したものである。

コウノトリに対する住民の受け止め方がどう変わっていくか、今後も引き続き調査して明らかにしていきたい。



▲共生する住民とコウノトリ

「水災害前後での『コウノトリ野生復帰』を 核とする地域環境形成に対する意識」

日本大学生物資源科学部生物環境工学科
建築・地域共生デザイン研究室
谷垣陽介さん・小林智哉さん・浦上健司さん

◇研究目的

豊岡市では、コウノトリのブランド化による経済の活性化や地域づくりが展開されてきた。一方、豊岡市は台風の常襲地域でもあり、水害に悩まされてきた。特に台風23号の被害は大きく、総合的な治水対策が求められる中で、自然との共生を踏まえた環境形成をどう実現するかを考察した。

◇調査結果と考察

コウノトリに対する意識が高い地域でも、野生復帰より治水対策を重要視しているが、治水問題を出すことでコウノトリとの関係が希薄になるのではというジレンマも抱えている。コウノトリ育む農法に取組む人々は、農業振興と併せ、生態系の復元を行うことで地区の環境形成に寄与しているという認識はある。また、都市化による農地の減少が遊水地の減少につながり、水害の一要因になっていると認識している。しかし、環境水田が水害対策につながることは、あまり意識されていない。

また、「コウノトリの保全」と「水害対策」は相反するものであるという意識を変えるため、自然保護と水害対策が行政や専門家の縦割りの意図で進められている現状を改善する必要がある。